

H30年度Ⅰ期 グループ企画2-1

番号	氏名	渡航先	国・地域	渡航先での受入期間
1	A. H	Mahidol Universtiy, Ramathibodi Hospital (マヒドン大学医学部)	タイ	H30/8/22-H30/8/27
2	H. R			
3	K. K			H30/8/20-H30/8/27

2017年度岸本国際奨学金による海外活動実施報告書

渡航先および受け入れ機関名

タイ バンコク

マヒドン大学医学部ラーマティボディー病院

(Mahidol University Faculty of Medicine Ramathibodi Hospital)

国際医療研究会

医学科4年

A. H

海外活動期間：2017年8月22日～8月27日

前に動き出したほうが自分にとって非常にためになり良いことを知った。これからもどんどん海外を訪れたい。しかし、海外に行くにも準備が必要で、今回思ったのは、海外の人と何か真剣に語り合えるものが必要であると思った。僕らの場合はまずは医学についての知識であり、しっかりそれを深めていることで海外の医療事情と比較・考察が向こうの人ができる。あと、言うまでもなく英語の能力をあげなくてはならない。彼らは英語を非常に堪能に話することができる。専門に入ると英語が極端に少なくなるので自ら学んで行きたいと思う。

このプログラムを経験する上で奨学金という形で援助してくださった岸本先生には非常に感謝しております。ありがとうございました。この恩を忘れず、これからの勉学に励みたいと思います。

1. スケジュール

詳細な活動内容については第2項「活動内容」で記述する。

8月22日 伊丹空港発

8月22日 バンコク・スワンナプーム空港着

8月23日 Ramathibodi病院にて、病理・法医学教室、救急、およびCyberknife Technologyの見学

8月24日 Ramathibodi病院にて、放射線画像診断科(AIMC)、精神科の見学および、5年次形成外科の実習への参加

8月25日 パタヤ周辺の観光

8月26日 パタヤ周辺の観光

8月27日 シリラート博物館見学、スワンナプーム空港発

8月28日 関西国際空港着

2. 目的

タイで最も素晴らしいとされる病院の一つであるRamathibodi病院の見学を通してタイの医療をまなび、日本の医療との相違点について考察する。そしてタイの学生との交流および様々な文化や自然に触れることで日本に止まらない国際感覚を涵養する。また、大阪大学とマヒドン大学の国際交流の伝統を受け継ぎ、その友好関係を次世代へと伝達していく。

3. 活動内容

プログラムの概要

この活動は大阪大学国際医療研究会がタイのマヒドン大学医学部と毎年行っている交換留学プログラムである。

今年度も昨年までと同じく、7月初旬から中旬にかけてにマヒドン大学の医学生が来日し、大阪大学付属病院で実習や施設見学の案内や、ホームステイ先の手配、関西の観光を行った。そして、8月下旬に私たちがタイへ訪れ、病院見学、文化施設の見学等をした。

プログラムの詳細

A; Mahidol University Hospitalの見学

1.病理・法医学教室見学(8/22,午前)

タイでは、院内死した患者に対して理由が明確である場合、病理解剖はほぼ行わないという事だった。大腸がんにより死亡した患者の遺体を（本来は解剖はしないが）解剖室に運んできていただき、死後硬直の見方について説明を受けた。各筋肉・関節の硬直、水晶体の濁り、また赤沈を背部の皮膚の赤色で判断する方法を理解した。

その後、様々な病理解剖時の検体を見せていただいた。肝臓や心臓などの臓器を保管し

ているものであったり、珍しい症例のものをガラスケースに保管しているものもあった。キャベツを気管に詰まらせて死亡したケース、大動脈解離StanfordI型のケースなどがを拝見した。解剖室に遺体を保存して置くための冷凍室、さらにはお別れの儀式を行うための部屋も存在した。当大学では年間100人ほどが解剖されているとのことだった。わたしは1度病理解剖の見学をしたことがあるが、日本の解剖室とそこまでの違いがあるようには感じなかった。しかし、死因究明の精度がどれほどのものなのか、などは詳しくわからなかった。

タイで病院搬送される患者の中で最多の原因は交通事故であった。タイの交通事情は日本人の目から見ても非常にひどく、バイクでの事故も非常に多いとの事だった。



法医学教室前での集合写真

2.救急(8/22,午前)

救急科の学生向けの訓練センター、受付、それぞれの診察室、そして管理センターを見学させていただいた。

訓練センターでは、2つの訓練室があった。一つは心電図などの医療器具が置かれており操作を練習する部屋、もう一つは救急救命を学ぶマネキンが置いていた。多数の研修医がそこで実習を受けていた。AEDの実習もしていたが、ここ5年くらいでようやく公共施設などにAEDが普及してきたという話をお聞きした。

次に病棟を見学させていただいた。男性用病棟、女性用病棟、そして小児用病棟の3つに分かれているらしく、そのうちの主に男性用病棟と小児用病棟を見学した。

印象に残っているのは小児病棟である。日本と同様、小児病棟のはカラフルで雰囲気も明るかった。話を聞くとところによると、多いのは交通事故のほか、インフルエンザ、肺炎、

そしてデング熱だった。四季のあまりないタイでは、インフルエンザは7月-9月に流行するとの事だった。脱水の患者も多いらしく、輸液をされている患児も多かった。

最後に1階にある救急の外来を見せていただいた。受付で重症度を5(重症)から1(軽症)までレベルわけされていた。重症4-5の人はすぐに緊急の治療室に運ばれて、治療を受けていた。緊急治療室の近くにCT,MRIなどの画像検査室があり、効率よく診断を行っていた。救急車がそのまま入ってこれる大きな病室もあり、超緊急の患者はすぐにその部屋へと救急車ごと搬送されるという事だった。

救急車の制度について質問をしたところ、日本とは違い救急車は病院に所属しているとの事。救急時は1669にコールするとバンコクならバンコクの中央センターへと繋がり、そこから急病人がいる場所に近い病院へと救急車の要請が飛ぶ、というシステムになっているそうでした。



ラマティボディー病院の救急車 タイでは救急車は病院に配置されていた

3.サイバーナイフセンター(8/22,午後)

サイバーナイフ専門のセンターを見学させていただいた。サイバーナイフの修理、もしくは点検中だったためか、中身の基盤も見せてもらうことができた。

サイバーナイフはロボットアームにより様々な方向から放射線を照射するものであり、がんなど腫瘍に対して特異的に放射線照射をするものと説明を受けた。広汎な部位に行うわけではなく、小さい部分に照射するため、副作用が少なくなるのがメリットだという。

腫瘍の位置を細かく把握したのち、その部位のみに放射線を照射するため、頭部の固定が重要になってくる。そのため、患者一人一人に対して固定するためのプラスチック製のマスクを作成することになっていた。我々の一人も実際に経験した(写真3)。働いている人は非常に女性が多かった。非常に先進的な施設であると感じた。



サイバーナイフ治療用のマスク作成 水浴で熱した樹脂製のプレートを顔に押し付けてマスクを作成する

4.Salaya Camous 見学(8/22,午後)

SalayaCampusという、Mahidol大学に入学した後2年間通うキャンパスを見学した。1,2年生はほぼ全員が寮に住むらしく、17時ごろのカフェテリアなどは非常に活気があった。また全体としても非常に広く、記念ホールなども含め敷地面積は阪大の豊中キャンパスをはるかにしのぐものだった。システムとしては阪大とほぼ同じで、2年間通った後、それぞれの学部学科などに応じてキャンパスが変わるとの事だった。

5.Advanced Diagnostic Imaging Center(AIMC)見学(8/24,午前)

主に放射線画像診断を行なっている部署だった。担当してくれた所長の英語が訛りが強すぎて聞き取りづらかった。CTscanやMRIの基本的な原理について、詳しく説明を受けた。理解するのに必死になりすぎて、実際に行っている所などがあまり印象に残っていない。

6.精神科 (8/24午前)

精神科の診察を、診察室とマジックミラーで仕切られた、診察室からは見られないが診察室を見ることはできる部屋から、診察を見学することができる。残念ながら、診察予定だった人に別の検査が入ってしまい、診察を見ることは叶わなかった。その代わりに、精

神科の先生やレジデントの方達と非常に有意義な会話をする事ができた。

タイでも、SexやGenderに関する事は家庭の中で非常にタブー扱われることが多く、限られた裕福な家庭でのみ、そういった教育がなされるとの事だった。そのため、経済状態が悪い人がSexなどに関する問題を抱えて来院するとの事であった。望まない妊娠をして、墮胎をするかどうかの相談であったり、戸籍上の性と実際の性の乖離に悩まされて相談するケースであったりが多いとの事だった。

タイではいわゆるニューハーフ、LGBTの存在が日本よりポピュラーであり、そういった人たちによるショーなども行われている。日本でより、LGBTの人が受け入れられているなという印象も受けた。タイでのGenderChangeに対する考え方や医療に関しては、日本に先んずる可能性もあるのではないかと考えさせられた。

精神科の先生方は非常に日本の医療にも興味を持っており、様々な日本の状況をお話ししタイの状況と比較してdiscussionを行うことができた。日本の精神科事情にさほど精通していなかったため、もう少し勉強しておけば深い議論をできたのではと後悔した。



精神科の診察室。こちらからは向こうの病室が見えるが、診察室側からこちらは見えない。患者には窓の向こうに医師がいることは説明されているという。

6.整形外科実習(8/24午後)

5回生の実習中だったらしく、英語ではなくタイ語でずっと実習が行われていたため、理解できる範囲は少なかったが、学生が教授らと和気藹々と話しながら実習を行っている姿が印象的であった。実習は10人ほどの生徒と教授により行われており、ギプスによる様々な部位の固定の方法を教授していた。その後実際にギプスを取り付け、取り外す体験をさせていただいた。整形外科の実習を受けたことがなかったが、固定する時のポイントをわかりやすく医学生が教えてくれたため、非常に得るものは多かった。



5回生とギプス作成の練習

B;病院以外の見学

1. Alcazar Cabaret show

タイで有名なニューハーフショーを鑑賞した。先述の通りタイではニューハーフやLGBTが受け入れられており、多くのお客さんが鑑賞していた。

2. Pattaya Beach at Koh Lahn

タイの西部にある浜辺の州、パタヤへと遊びに行った。日本より砂浜の砂つぶが細かく、粘土のようだった。海の水や景色もとても美しく、タイの学生たちと楽しいひと時を過ごすことができた。



3. Floating Market

水の上に浮いている大きなマーケットでショッピングを楽しんだ。タイではこう行った屋台などの店ではディスカウントをすること普通らしく、最初の値段の半額くらいで買うこともしばしばであった。

4. Pattaya Elephant Village

タイの像と触れ合う機会を得ることができた。タイでは様々な場所に像のPalaceがあるらしく、アユタヤなどにもあるということだった。その代わり、日本で言うところのzoo、動物園はあまりメジャーではないらしく、説明してもあまりピンときていない様子であった。

5. シリラート博物館

自由行動の時間を利用して解剖学博物館と人類学博物館へと訪れた。解剖学博物館では人体の輪切りの標本のほか、双胎癒着で死んでしまった子の標本や、人体の縦斬りの標本も存在した。人体の動脈のみ、静脈のみを綺麗に解剖した標本などもあり、非常に興味深かったが、見る人がみれば非常にグロテスクに感じるだろうな、という内容であった。人類学博物館では石器時代の石器についての考察が深めてあり、非常に興味深く感じた。



シリラート博物館；解剖学博物館 来場者は少なく、ほとんどがここに留学してきた外国人であった。日本ではなかなか見られないような標本が多く興味深かった。

6. バンコク中心部；SIAM Discoveryなど

バンコク中心地のショッピングセンターであった。大きなデパートが林立し、中身も日本のそれとほぼ変わらず、綺麗であった。初日以降とこの日では、すべてのものの価格帯が大きく異なり、デパートでの商品は日本の値段とそう変わらないことに驚いた。

4. 成果

4-1. 医療機関見学

タイは医療後進国なのではないか、という先入観を簡単に覆されてしまった。病院の中は清潔であり、また最新の医療機器が揃えられていて、考えを改めさせられた。

4回生ということもあり、かなりの内容を理解することができた。臨床の講義を受けていない2,3回生が理解に苦しんでいたため、理解の手助けを多少は行ったが、病院の診療科見学は臨床講義を一通り終えた我々4回生の時期がちょうど良いのではないかと考えた。

多少の違いはあれ、大まかな医療制度は日本と同じであった。いくつか、日本の制度を模倣したものもある、ということをおっしゃっていた先生がたもいた。医療に関して、アジアにおける日本の存在は未だ重要であると感じた。同時に、タイの医療の成長を鑑みるに、日本の医療もより進化していかなければならないと強く実感した。

医学生の勉強の姿をちらほらと見かけることが多かったが、皆がiPadを用いてe-learningを行なっている姿に驚愕した。すべてのスライドはPowerPointで配布されており、apple pencilで書き込むというスタイルを取っていた。また、教科書、スライドともに英語で学習しているのも印象的であった。

4-2. 社会見学

印象的に残っているのは、一昨年（2016年）10月に亡くなった国王、ラーマ9世の肖像画が空港、道路、病院、寺院など、町中のいたるところにあり、国民から親しまれていたということである。日本の天皇と比べて、国民にとって身近な存在であったことを感じた。

また、タイの治安は日本ほどは良くない、と最初に説明を受けており、かなり警戒しながら観光しなければならない、と考えていた。しかし実際、接した人は優しい人ばかりで、悪質な手口に引っかかることなどはなかった。最も多いのがタクシーで外国人からぼったくるケースであるらしいが、それにも遭遇することなく滞在を終えることができた。現地でガイドをしてくれた現地の学生には感謝しきりであった。

5. 抱負

とにかく痛感したのが英語力不足であった。頭では理解していても、英語の単語が出てこない。医学英語が聞き取れず、理解が追いつかない部分も多かった。タイの学生、しかも3年生に教授の説明をわかりやすく教えてもらった時、ありがたさと同時に自らの英語力の限界を情けなく感じた。将来的に海外で仕事をするにせよしないにせよ、英語力、特に診察、診断はもちろん、海外の学生に対して的確な説明をできるだけの英語力を磨かなければならないと強く感じた。タイの学生と話す機会が非常に多かったが、我々の英語力の足らなさからか、会話内容が少し幼いものになってしまったという実感もあった。英語を使いつつ、高度な内容を議論できるようになるには英語のスピーキング学習が必要不可欠であるとも感じた。同時に、医学を勉強するときに、英単語を意識することも大切だと考えた。

また、純粹にタイでの滞在は非常に楽しかった。異国の地で、可能な限りの英語を駆使しつつ過ごすのは非常に刺激的で、有意義であった。次回は3ヶ月以上過ごしてより深く他国での生活をしてみたいと感じた。

最後に、プログラムでは、タイの学生、先生に大変お世話になりました。受け入れをしてくれた学生は、病院や様々な施設に時間とお金を使って連れて行ってくれた。また、病院では、多くの先生にわざわざ時間を割いて、案内や説明をしていただいた。ここで受けた恩を来年度以降もこのプログラムに協力し、継続していくという形で返していきたいと思う。そして、ここで学んだことを活かして、視野の広い医者になろうと決意した。

平成 30 年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

渡航先及び受け入れ機関

タイ バンコク

マヒドン大学 ラマティボディー病院 医学部

Bangkok, Thailand

Faculty of Medicine, Ramathibodi Hospital,

Mahidol University

海外活動期間

平成 30 年 8 月 22 日—8 月 27 日

国際医療研究会

大阪大学医学部医学科 2 回生

H. R

1. スケジュール一覧

8/22

スワンナプーム空港到着➡ショッピングセンター➡寮に帰宅

8/23

病院見学（法医学、救急）➡ウェルカムパーティー➡病院見学（放射線科）➡マヒドン大学 salaya キャンパス（サイクリングして見学）➡夕食➡カオサン通り 観光➡帰寮

8/24

病院見学（画像診断科、精神科）➡大学の食堂にて昼食➡実習見学（5 回生の整形外科実習見学）➡パタヤ地区に向け出発➡道中のサービスエリアで夕食➡タイのショー鑑賞➡パタヤ着

8/25

パタヤから離島に向け出航➡離島着➡朝食➡離島のビーチでマリンスポーツ体験➡昼食➡パタヤに戻る➡水上マーケット➡夕食 シーフードレストラン➡ホテルに戻る➡ホテルにて night party

8/26

Pattaya Elephant Village（象に乗る体験、タイの機織り見学）➡昼食➡バンコクに向け出発➡バンコク着➡夕食➡帰寮

8/27

大学の食堂にて朝食➡サイアムにてショッピング、昼食、夕食➡スワンナプーム空港

8/28

大阪空港着

2. 活動の目的

この度、タイの代表的な医療機関であるマヒドン大学ラマティボディー病院を訪問し、またそこに所属するマヒドン大学の医学生と様々な交流をしました。本活動を通し、日本とタイの医療を比較し、またタイ特有の医療を学び、タイの医学生と意見を交わし様々な視点から医療を考える。さらに、タイの医学生にタイの名所を案内してもらい、タイの生活、国民性、文化を体験する。以上のことを本活動の目的とした。

3. 活動内容

プログラム概要

本活動は大阪大学国際医療研究会がタイのマヒドン大学医学部と毎年行っている交換留学プログラムであり、今年で 24 回目となる。

今年度は7月初旬にマヒドン大学の医学生 5 人を受け入れ、大阪大学医学部附属病院で実習や施設見学の案内をし、また日本の文化、雰囲気に触れてもらうため、大阪、京都、神戸など関西の代表的なところを案内し、一緒に巡りました。そして、8月下旬に私たち日本から 5 人がタイへ訪れ、病院見学、名所めぐり等をしました。

プログラム詳細

3-1 病理法医学 (Department of Pathology, Forensic Science)

病理法医学科はラマティボディー病院の一階にあり、病理解剖や司法解剖を行っている。タイの学生とレジデントの方から案内を受けた。入室するとおよそ 8 時間前に亡くなられた方の献体が解剖台に横たわっており、その方の献体を使い死後硬直に関する説明を受け、献体の膝関節やひじ関節の動きなどを実際に触れて体感した。大阪大学医学部の二年次前期では、解剖が始まっておらず、二回生の私にはこの経験はとても新鮮で勉強になりました。他にキャベツをのどに詰まらせた標本、大動脈解離を死因とする標本を見せたいただいた。

3-2 救急科 (Department of Emergency Medicine)

救急科は 4 階の建物からなる。1 階には受付、処置室、検査室、救急管制室がある。1 階のエントランスに入ると受付とベッドが数床あり、私たちが訪れた時は、4 人ベッドで寝ていた。受付では体温、血圧、保険の有無を確認する。隣の部屋は処置室であり、ベッドが数床と医師のデスクがあり、そこで医師は CT などの画像をチェックしていた。処置室の奥の部屋にさらに大きい救急車が入れるような処置室があり、そこでは非常に状態の悪い患者を様々な分野のエキスパートの医師が協力して、診ることができるように CT や MRI などの設備が整えら

れている。救急管制室では救急救命士と救急車の救命士が連絡しあっていた。タイでは、救命士になるには4年間の訓練が必要である。救急車は日本と違い病院にあり、救急車を呼ぶときは1669にかけ、そうすると中央のセンターにつながり病院へと連絡が行き、病院が救急車を出すのだ。タイでは交通渋滞が頻発するため、救急車の代わりにバイクを出すことがあるそう。次に、2階にはオブザベーションルームが小児、男性、女性の3室あり、各部屋は仕切られておらず、大部屋でナースステーションがオープンな状態で併設されていた。患者のベッドはそれぞれカーテンで仕切られていた。小児のオブザベーションルームには、デング熱、インフルエンザ、肺炎の患者がいた。デング熱は主に熱帯気候の地域でみられる感染症で日本ではこの感染症を罹患している人はあまり見られないだろう。また、インフルエンザに関して、タイでは主に7-9月に流行るそう。成人の患者は虫垂炎などにかかっているそう。そして、ベッドの数が足りなくなることがしばしばあり、ほかのところに移送するため、小児病棟に老人が寝てくこともある。そして、3階には訓練のためのデモンストレーション部屋が2室あり、片方の部屋には、心電図などの検査機器がおいてあり、その操作方法を習得し、他方の部屋には、人体模型がおいてあり、救急救命の仕方、胸骨圧迫やAEDの操作方法を学ぶ。私たちが見学しているときも多数のレジデントが訓練していました。AEDは、昔はマイナーなものであったそうだが、ここ5年でようやく普及してきたそう。最後に、4階はICUであり、20床ほどのベッドがあり、そのうち5床が個室で、他は相部屋でそれぞれカーテンで仕切っていた。

3-3 放射線科 (Cyberknife Technology of Department of Radiology)

放射線科は地下にあり、とても清潔で、大学病院にしては少し派手な作りになっていた。これは、病院に来られる患者に少しでも陰鬱とした気分を軽減してもらうためだそう。私たちが見学したときは、3部屋案内してもらいました。1つ目の部屋には、サイバーナイフという大きい放射線治療装置があった。この装置は、あらゆる方向から放射線を患者の脳内の腫瘍に照射し腫瘍を除去するものである。2つ目の部屋には、リニアックというこれもまた、最新の大きい装置があった。この装置もサイバーナイフと同様、放射線治療装置であるが、この装置は荷電粒子を一直線上に加速させた放射線を照射することで、がん細胞などを取り除くものである。3つ目の部屋は、サイバーナイフでの手術の時に患者の頭にかぶせる形状記憶プラスチックマスクを作成する部屋であった。実際に、私たちのメンバーの一人がそのマスク作り体験をさせてもらっていた。まずプラスチックシートを、70℃のお湯につけて柔らかくし、そのまま患者の顔と頭を覆うように張り付け、固定し、2分ほど待つと固まり完成で、非常に簡単な作業であった。

3-4 画像診断科 (Advanced Diagnostic Imaging Center)

画像診断科では、MRIやCTを用いて画像診断を行っている。ラマティボディー病院ではとても忙しい部署であるそう。MRIやCTなどの機械自体は日本のものと違いはたいして

なかった。タイ特有の研究で、小児期からムエタイをしていると IQ が下がるというデータが挙げられたり、パーキンソン病などの研究が進められているそうだ。

3－5 精神科 (Department of Psychiatry)

週に一回開設される精神科外来で、診察の様子を見学させてもらう予定であったが、患者さんが他の科にかかっていたため見学できなかった。見学させていただくはずの患者さんは、未成年の妊婦で、出産に不安があるという方であった。精神科は他の科と違い、外から見えないように仕切られている上、精神科の中の診察室もマジックミラーで併設されたもう一つの部屋が見られないように区切られていた。これは心に不安を抱えた患者さんの気持ちを配慮してのことだそうだ。また、患者さんに女性が多いからか、医師はレジデントを含め全員女性であった。

3－6 5 回生整形外科実習

ほかの病院見学と異なり、マヒドン大学の 5 回生とともに整形外科実習室でギプスの取り付け、取り外しについて説明を受けた後、実際に体験させてもらいました。まず、布のようなシートを水につけドロドロにし、それを腕に巻いて乾かしてギプスを作るのだが、固まるのが早く、巻くのにとっても苦労しました。また日本のギプスがプラスチックシートのようなものを水にぬらして巻いて乾かして作るという点からタイのギプスとは少し違うことがわかりました。取り外す際は日本と同じように、ギプスカッターを用いて行うのですがそれも学生がしていて、少し不安でしたが、しっかりできていました。

3－7 マヒドン大学 salaya キャンパス 見学

サラヤキャンパスは全学教育のためのキャンパスで、大阪大学という豊中キャンパスのような位置付けのキャンパスである。マヒドン大学の医学生はこのキャンパスで、2 年次の前半まで一般教養を学ぶようだ。全学のキャンパスなので、非常に大きく、サイクリングでも回り切れないほどで、マヒドン大の学生もキャンパス内を自転車で移動しているようであった。また、キャンパス内に入っているコンビニ、食堂、ショップがとても充実していて、学生にとって過ごしやすくなっている。そして、建物自体は非常にきれいで教育にたくさんお金をかけているのを感じた。

3－8 パタヤ観光

私たちはタイのパタヤ地区で2泊しました。パタヤは首都バンコクから車で約2時間半ほどの場所にあり、タイで有名なビーチリゾートである。私たちは、パタヤから船で少しのところのラン島という離島のビーチでタイの学生と楽しい時間を過ごしたり、pattaya elephant villageで象に乗る体験をしました。その象はとても賢くしつけられていて、日本語の数字を理解していたほどでした。また象は背中が大きく、安定していて乗り心地はとてもよかったです。

パタヤの水上マーケットは、船に商品を積んで、水路の上を移動しながら販売していました。日本にはこういった形のマーケットがないのでとても新鮮でした。また水上マーケットには、タイのあらゆる地方の名産品が売られていて、見飽きることがありませんでした。

パタヤでの夜はタイの学生とホテルでパーティーをしました。タイの学生の子たちと、歌を披露しあったり、お互いの言語を教えあったりととても有意義な時間を過ごすことができました。

4.活動の成果

A 病院

事前に聞いていたよりも、タイの病院はきれいで衛生面もしっかりしていた。日本と違っていた点は、救急車だけでなくバイクで救助しに行くことがあることや、救急車が消防署でなく病院にあることであったり、精神科に来る患者の症状がタイ特有であるということだ。私はまだ、2年次で日本の病院に回る機会がまだあまりなかったが、今回の交換留学プログラムを通して、先に海外の病院を回れたのは、非常にいい経験になったと思います。

B 社会、文化

タイの国民はみなフレンドリーで、優しいと感じた。タクシーの運転手は積極的に英語を話して、コミュニケーションをとろうとして、タイでおすすめの場所などを教えてくれた。タイの人としゃべっていて思ったのがみなある程度英語を話すことだ。また話すのが下手でも、英語をしゃべろうと努力していた。タイでは、英語教育が推し進められているおかげなのだろうと思った。だが、未発達だと印象を受けた部分もあった。タイでは、交通渋滞が多発したり、交通マナーを守らない運転手がたくさんいた。これは、やはりまだ、交通の生場が遅れているからなのだろうと感じた。このように、タイで1週間ほど暮らして、逆に日本はどの面が優れていて、逆にどの面が遅れているのか客観的に知ることができて、よかったと思います。

5、今後の抱負

今回、タイとの交換プログラムを通して、一番心に刻まれたのは、自分の英語力のなさである。タイの医学生は、自分の言いたいことをすぐ英語にできるのに対し、私はまだ聞き取るのに精いっぱい、私から自発的に会話することができなかった。また病院実習の際も、教授の英語での説明もわからないことが多々あり。年上の日本人メンバーに聞かないとわからないことがあったので、とても歯がゆい思いをした。これから、医学の専門の授業が多くなり、ますます英語に触れることがなくなるので、自発的に英語を学んでいきたいと思います。また、海外留学を今回初めて体験し、とても新鮮で学ぶことや感動することが多かったので、これからも積極的に留学プログラムに参加していきたいと思います。また、今回奨学金を出資していただいた岸本先生をはじめ、この留学を支援していただいた関係者様、本当にありがとうございました。

2018 年度岸本国際奨学金による海外活動実施報告書

渡航先および受け入れ機関名

タイ バンコク

マヒドン大学医学部ラーマティボディー病院

(Mahidol University Faculty of Medicine Ramathibodi Hospital)

国際医療研究会

医学科 2 年

K. K

海外活動期間:2018 年 8 月 20 日～2018 年 8 月 27 日

0. 活動目的

タイの医療活動と文化を実際にこの目で見て肌で感じる。医療のことを日本内の

みで考えるのではなく、海外にも目を向けられるようにする。日本とタイを比較しながら、日本の医療活動を再び考え直す。タイの医学生と交流を深め、医療教育の違いや、文化、食、性質の違いを感じる。

1. スケジュール

8月20日(月)

関西国際空港発 スワンナプーム国際空港着

8月21日(火)

ワットポー（古い寺院）

小児科見学

3年生細菌学実習

8月22日(水)

栄養学

王宮

シリラート医学博物館

アジアンティーク（ショッピングセンター）

8月23日(木)

病理法医学

救急

ウェルカムパーティー

放射線治療

マヒドン大学へ移動

サイクリング

8月24日(金)

画像診断科

精神科

5年生整形外科実習

パタヤへ移動

8月25日(土)

パタヤ 離島

フローティングマーケット

海鮮料理屋

ホームパーティー

8月26日(日)

象に乗る

病院へ戻る

8月27日(月)

サイアムにて散策

スワンナプーム国際空港発

8月28日(火)

関西国際空港着

2. 活動内容

1 小児科

担当教授が病棟を案内してくださった。この科がタイで初めて訪れた科だったんだが2年前に聞いたタイの病院の状況とは異なって、日本と同様綺麗な場所で驚いた。少し前まではこの科にはエアコンがなく、最近ついたらしい。政府が金を医療機関にあて、発展させようとしているそう。未熟児や疾患のもった赤ん坊を保育器で育てたりするのは、阪大の小児科医で見た光景とあまり変わらないように思った。

2 栄養学

病院で食べられている、水に溶かす粉末タイプの医療食品を試しに食べさせていただいた。日本でそのようなものを食べる機会がなかったので比較はできないが、いろいろな味付けがあり食べやすいものがほとんどだった。タイの人の大半がラクトースを分解する酵素を持たないそうなので、ラクトースフリーのものがほとんどでこれは日本とは少し違うのだと思う。医療食品の主なメーカーに *thai otsuka* というものがあり、日本の企業の海外展開したものらしく、ここで日本の海外に対する影響力を感じた。

3 病理法医学

当初、事故事件などがあればその御遺体を見せていただき講義をしていただく予定だったのだが、その日は運ばれてきた遺体がなかったので、その日の朝病院内で亡くなった遺体を運んできて講義をしていただいた。2人の研修医3年目の方が担当してくださった。死後硬直の様子を目の前で教えてくださった。人の遺体をああいう風にして触れるのは初めての経験だったのではじめは少し怖かった。また、キャベツを喉に詰まらせて死んだ人の喉の標本や大動脈解離の標本をまず見せられ、どういう死因か当てるということもした。後に述べる博物館でもたくさんの遺体が標本されていたことから、タイの人は遺体に対する畏怖の気持ちが日本より少ない気がした。もしくは、医学の発展のためにできることはなんでもしようという、向上心によるものなのかなと思った。

4 救急科

救急科は見た中で一番広かった。救急車はあるのだが、めったに使われることはなく、ほとんどの患者がタクシーか自家用車でくる。救急車が使われる場合はよっぽど重病な場合である。トリアージがすごく患者はまず1階の道路に面した大

きな部屋の扉から入ってきてベッドに乗せられそこに待機させられる。症状によって患者を移動させ診察に入るそう。この部屋には、MRI や CT の部屋が横に併設されており診察しやすいようになっている。また、急を要しているときのために、救急車ごと建物の中に入れ手術できる部屋も併設されていた。救急車の他に救急バイクがあった。バンコクは交通渋滞が頻繁に起こるため、救急車では時間がかかる。応急処置の道具をいち早く届けるために救急バイクが活用されているそう。

5 放射線治療科

腫瘍をサイバーナイフやリニアックなどの機械で取り除く科で、その方法や機械についての説明を受けた。機械は非常に精巧なもので、日本と技術の差は感じなかった。サイバーナイフで治療する際は、頭を固定しなく、形状記憶プラスチックを用いてマスクを作る。一緒に行った 1 人はそのマスクを作ってもらっていた。

6 画像診断科

MRI や CT を使った、画像をみて診断する科である。MRI、CT はどの科でも用

いるため非常に忙しい科となっている。研究も活発で、ムエタイと IQ についての研究を進めているとおっしゃっていた。ムエタイを幼い頃から始めると IQ が低くなるというデータが出ているらしい。研究内容は独自だが、日本とほとんど変わらないように感じた。機械も日本のものと変わらないように思った。

7 精神科

本来は患者を診察しているところをみるはずであったが、患者が別の科での診察が長引いたらしく立ち会うことができなかった。この病院はバンコクで大きい病院なので、来る患者もかなり重い悩みを抱えていることが多い。診察する際は医者と患者 2 人きりで、その横の部屋がマジックミラーになっていてそこから研修医などが見る。未成年で妊娠や、トランスジェンダーについて悩んでいる患者が来るそうだ。

8 3 年生細菌学実習見学

阪大と同じような実習内容らしく、生徒の雰囲気も似ていた。ただ、大阪大学より学生同士の距離が近く、お互い助け合っている様子が印象的だった。

9 5 年生整形外科実習

5年生の方が手伝ってくれながらの実習だった。ギブスをはめる練習をしたのだが、タイのギブスは布のようなものを水につけてドロドロになった後に急いで巻きつけ乾くと固くなっているというものだった。日本のものは巻く前はやらかなくてもまだ少し硬いので巻きやすいように思うのだが、タイのものはドロドロになっているので巻きにくかった。

10 シリラート医学博物館

この博物館は別のシリラート病院にある医学の博物館である。この博物館には本物の人間の標本がたくさんありました。最も印象に残ったのは、様々な奇形児が展示されているコーナーで赤ん坊をそのままホルマリン漬けしていた。それが10人ほどいて、非常に勉強になった。あとは、凶悪犯罪者の死体を火葬するに値しないという理由から展示していたのには、非常に驚いた。日本では絶対に経験できないことだった。

11 マヒドン大学サイクリング

非常に大きいキャンパスであった。一学年約3000人なので人数は大阪大学とあまり変わらない。大学だが制服を着用するのがタイでは当たり前だそう。施設は

非常に綺麗だった。政府体制が変わり、教育にお金をかけているためである。

12 タイの社会見学

寺院や王宮は派手な建物であった。きらきらしたデザインの繰り返しで豪華な造りになっていて、昔のタイの人の好みが出ているのだろうと思った。金閣寺のように日本の人もきらきらしたものが高貴だと考えるのと同様だと思った。

アジアンティークやサイアムのショッピングセンターでは、日本の店がたくさんあった。タイは親日国で有名であり、日本の店は人気があるそうだった。そのため日本の店がたくさん入ることになったそうである。値段はタイの物価から考えると少し高めで日本での値段とほとんど変わらなかった。

フローティングマーケットはタイ独特のスタイルであり、池の上で買い物ができた。市場では値引き交渉をするのが普通らしく、タイ語を話せない人はそれができない。このことから、タイではかなり観光産業に秀でているということがわかった。

パタヤでは、離島と象に乗る体験をしました。離島の海は綺麗でタイの学生とともに海で時間を過ごしました。また、象に乗る経験もできました。象は非常に利

口で象乗りのいうことを忠実に聞いていました。非常に大きいのに動きは軽やかであり、乗り心地は最高でした。

ウェルカムパーティーとホームパーティーでは、僕たちをもてなしてくれる非常に楽しいものになりました。20人くらいが集まってきて、タイの様々な料理と一緒に食べました。彼らは非常にフレンドリーで気さくに話しかけてくれました。英語も皆上手でした。ホームパーティーでは、タイの歌を僕たちのために歌ってくれたり、カードゲームをしたりと有意義な時間でした。

3. 活動の成果

A 病院

思っていたよりも日本と変わらないと思った場面が結構あった。施設、設備などはほとんど日本と変わらないと思った。しかし、救急科のトリアージの面は日本とは異なり、たくさんの患者が来るというので、日本より発展していったのだと思う。医者、医学生の割合も男女ほぼ同数であり、女性の医者がほとんどの診療

科もありました。タイでは子どもが生まれてもすぐに保育施設に預け夫婦共働きするのが普通だそう。女性にとって働きやすい環境ができている。

B 社会、文化

タイの人は皆優しい印象を受けた。道ゆく人が気さくに喋りかけて来る。困った時は親身になって助けてくださった。気候は暑く、湿度が高かった。食べものは辛く酸っぱいものがほとんどで、この気候に耐えるために力がつくようなものになっていたのだろう。バンコクもまだまだ発展途上であり、交通整備が行われていないにも関わらず車の量が非常に多いため朝、夕方は非常に渋滞が起こる。これからの発展が期待される。

4. 抱負

初めて海外の医療というものを目にし、また海外の友人が国を案内してくれるという経験をして、日本だけでなく世界単位で物事を考えることが実は身近なことだと気づいた。海外に行くことにそんなにハードルを感じる必要はなく、考える